会報No. 455

子どもの本 研究会

【私の一冊】

『星の王子さま』　サン＝テグジュペリ／作　内藤濯／訳（岩波書店）

辻　泰明

昨年４月、建築家の安藤忠雄さんから寄贈された「こども本の森 熊本」が県立図書館に併設して開館しました。建設に伴い、図書館正面入り口前に移設されたのが、「星の王子さま内藤濯文学碑」です。濯の肖像のレリーフの横には「いづこかにかすむ宵なりほのぼのと 星の王子の影とかたちと」の短歌。美智子上皇后が曲を付けたことでも知られる歌です。下部には原文と和訳で序文が刻まれています。

同作品の２００５年１月22日の著作権保護期間満了まで、日本で独占的な翻訳権を有していた岩波書店版の翻訳を担当したのが熊本市出身の内藤濯でした。濯の父、内藤泰吉は横井小楠門下の軍医で、古城医学校の設立にも尽力し、同校で北里柴三郎を指導した一人です。濯は、泰吉ら実学党と政見を異にした国権党が後ろ盾となっていた濟々黌ではなく、柳川の伝習館に進学。１年在学後に上京しました。開成中、一高、東京帝大仏文学科を経て、パリにも留学。１９５２年に石井桃子氏からの指名で同作品の原著からの翻訳を担当。翌53年に刊行され、重版を重ねてきました。私が所持している「愛蔵版」（２０００年）は、８年前に亡くなった母の闘病中に、伯母から贈られたものです。

原題『Le Petit Prince』、直訳で「小さい王子」を、物語の内容に合わせて「星の王子さま」と表現したところにも、70年以上の長きにわたって愛されてきた秘訣があるのかもしれません。サン＝テグジュペリ生誕１００周年記念事業の一環で、１９９９年、箱根町仙石原に開館した「星の王子さまミュージアム」は、建物の老朽化やコロナ禍での来館者減少を理由に、２０２３年３月末に惜しまれながらも閉館したそうです。

２００５年１月に日本での翻訳出版権が消失すると、多くの新訳本が出版されました。２００８年11月に刊行されたゴマブックス版では、熊本市出身の葉祥明氏が挿絵を担当しています。

「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ」。見えないものを追求し、次代に伝える文化活動を、今後も続けてまいりたいと思います。

（熊本まちなみトラスト理事、熊本近代史研究会事務局長
熊本地名研究会運営委員、文化講演会／宇城幹事）

2025年 1月22日（水）特定非営利活動法人 熊本子どもの本の研究会　発行

https://www.kodomonohon.org　E-mail: info@kodomonohon.org

新年のご挨拶

特定非営利活動法人熊本子どもの本の研究会
理事長　横田　真

新年明けましておめでとうございます。

昨年は、研究会の40年間の活動を再認識するとともに、地域との交流を再開する年となりました。

「こども本の森　熊本」開館を記念しての総合文化誌「KUMAMOTO」（3月号）の特集に一文をというお話をいただき、「初茜」、会報、「みんなあつまれ」などの記録を見返しながら、「熊本子どもの本の研究会　四十年の歩みとこれから」という形で寄稿させていただきました。これまでの研究会活動に携わってきた母（前理事長）及び会員の方々の想いを私自身が再認識するとともに、研究会の活動を広くご紹介する良い機会となりました（ホームページに掲載しておりますので、ご参照願います）。

母が元気な頃には、事務所にある「びわの木文庫」に近隣の子ども達が来て、本を借りたり、イベントに参加したりしてくれていたのですが、母が体調を崩してからはそのような交流はなくなっていました。そのような中、西原校区協議会の日隈忍会長からお声かけをいただき、「にしばる桜まつり」（3月17日に西原小学校で開催）に参加し、雨の中ではありましたが、体育館に設置したブースで「びわの木文庫」のチラシを配るとともに、読み聞かせをいたしました。さらに、西原小学校の学童クラブにもご紹介いただき、5月より文庫の本の学童クラブ向け貸し出しを開始しました。その後1、2カ月に1回程度の頻度で40冊ほどの絵本、児童書、紙芝居の貸し出しを行なっています。今年の「にしばる桜まつり」にも参加し、西原地区との交流を更に深めるとともに、近隣の他の小学校の学童にも本の貸し出しができるようになればと思っています。

２０２４年度の講座活動は、公開講座「日本の昔ばなしを読む」（講師：森正人さん、全3回）及び田口祐子さんのおはなし会を含め、全て予定通りに開催できました。「日本の昔ばなしを読む」は公開講座としては初めてオンライン参加者も受けつけ、熱心な意見交換が行われました。通常の講座は今年も毎月第3水曜日（変更あり）に開催いたしております。皆様のご参加をお待ちしています。おはなしボランティア「びわの木」は、12月までにすでに20回実施しており、3月までにあと3回予定しています。この活動を支える語り手の養成研修も続けています。東京家政学院大学非常勤講師で会員でもある竹内識晃さんに講師をお願いしている「グリム童話の魅力」（オンライン）は、8月に「7羽のからす」を題材に開催しました。次回は2月23日（日）に、「ブレーメンの町の音楽隊」を題材に開催予定です。子どもと大人の読書会（オンライン）は、6月に小・中学生の部を行い、今年1月5日に新しいメンバーも迎えて小学生の部を開催いたしました。参加者を少しずつでも増やしていければと思います。

ふるさとくまもと応援寄附金（熊本県）による支援金は、公開講座の開催費用に活用させていただきました。来年度以降は、公開講座に加え、おはなしボランティア「びわの木」活動や「びわの木文庫」の児童書の充実などにも活用できればと考えております。熊本県外のお知り合いの方々にもご紹介いただければ幸いです。

子どもたちが本に接する機会を増やすとともに、読書の楽しみを知るきっかけづくりに今年も取り組んで行きます。児童書のご寄付なども含め、引き続きご支援方宜しくお願い申し上げます。

谷川俊太郎さんを偲ぶ

～スタッフの思い出を交えて～

開演前、谷川さんは、まだ誰もいない大ホールのはるか後方の席に座り、じっと前を向いていらっしゃった。２０１１年、熊本市のくまもと森都心プラザホールで開催した「びわの木文庫40周年記念事業」のときのことだ。ピーンと張りつめた空気を纏うお姿に、「控室にどうぞ」とお声掛けすることができず、その場を後にした（もちろん、その後、谷川さんはご自分で控室に来られた）。本番、舞台の上では少し高めの声で、語尾まではっきりとしたぶれのない言葉を発せられる。誰にも何処にもこびない言葉は凛としている。でも、場の雰囲気は穏やかでやさしい。谷川さんの言葉が、私たちの心にあたたかく広がっていった。

リズムがある。繰り返したくなる心地よさがある。谷川さんの詩を唱えるとき、いつもそう感じている。スタッフのＨさんが幼かった娘さんとの時間、お気に入りだったのは『ことばあそびうた』（福音館書店）だ。「かっぱかっぱらった　かっぱらっぱかっぱらった　とってちってた」とひらがなの持つ大らかさを親子で口ずさみ、楽しんだという。Ｓさんが、小学１年生のおはなし会で「わるくち」（『いちねんせい』小学館）を披露したら、子どもたちが喜んで「もう１回、読んで！」「もう１回！」「もう１回！」のコール。「おたんちん」「どでどで」「ごびごび」「がちゃらめちゃら」「ちょんびにゅるにゅる」「ござまりでべれけぶん」、読むたびに大笑い。10回以上は読んでいた。Ｓさんの心に残る楽しかったあの時間。詩の楽しさ、言葉の楽しさ、みんなで読む楽しさを味わわせてくれたという。

また、１９９９年に開催した「出版記念音楽会ＤｉＶａ＋谷川俊太郎」。ＤｉＶａは谷川さんの長男でピアニストの谷川賢作さんが結成した音楽グループで、賢作さんは谷川さんの詩に曲を付けている。音楽会の間、私の中には谷川さんの「詩はいつも音楽に恋している」という言葉が巡っていた。谷川さんの言葉の持つ音楽性が具現化された時間だった。

そして、「聞く」ということの大切さをきちんと教えてくれたのも谷川さんだった。

15年以上前になるが、ひらがな長編詩６編からなる詩集『みみをすます』（福音館書店）を研究会の会報の巻頭言「私の一冊」で紹介した。表題の詩「みみをすます」は１編目。自分の周りに、人々の営みに、歴史に、明日に耳をすませと、静かに、激しく畳みかけてくる。谷川さんは、国語と社会の教科書についての鼎談『こんな教科書あり？』（谷川俊太郎・斎藤次郎・佐藤学／岩波書店）の中で、「言葉というのは、聞くということが前提にある」と発言している。また、小学１年生の国語の教科書を想定して作られた『にほんご』（福音館書店）では、編集委員の１人として、あとがきで、「読み」「書く」ことよりも「話す」「聞く」ことを先行させたと述べている。聞くことから豊かな表現が生まれる。聞くことができる人が、人の心に沁み入る表現ができると思った。

おはなし会で幼い子どもたちは、お話を一所懸命聞いてくれる。その時間を大切にしたい。同時に、私たちも幼い子どもたちの声に耳をすますことを忘れてはならない。谷川さんが教えてくれたのだから。

研究会では７回、谷川さんをお招きしている。その都度、サイン会は盛況となる。スタッフは、長い列の誘導や舞台裏やロビーの片付けに追われる。そんなとき、Ｓさんが耳にしたのは「スタッフの人たちの分の本は？」という谷川さんの声。私たちのことを気にしてくださっている、

そのことに感激し感謝したという。スタッフのMさんは、谷川さんが亡くなられた後、いろんな方が「谷川さんは誰に対しても人格が変わらない」とおっしゃっていた言葉をかみしめる。

２０１１年「びわの木文庫40周年記念事業　中高生によるインタビュー、アーサー・ビナードさんとの対談」のときの谷川さんと中高生との対話を思い出すからだ。やさしく、真っすぐな眼差しを向けられていた。

接待担当だったTさん。緊張しながらもお茶とお菓子をお出しした。その日のお菓子は熊本の有名なドーナツタイプのお菓子。谷川さんは「これ、おいしいね」と言って、一気に2、3個パクパク。びっくりしながらも、お茶目な一面に笑ってしまいそうになった。偉大な方を前に心和むひとときだったそうだ。

残してくださった作品はたくさんある。そして、私たちには残してくださったかけがえのない宝物のような思い出もたくさんある。でも、谷川さんがもういない……。そのどうしようもない悲しさに、「私は思わずくしゃみをした」。

ご冥福を心からお祈りいたします。

（木村一惠）

講座報告

児童書『虫のお知らせ』を読む

日　時　11月20日（水）10時～12時

課題本　『虫のお知らせ』作・おのりえん、絵・秋山あゆ子（理論社）

会　場　熊本市立図書館集会室

参加者　10人

担　当　安田晶子

課題本の『虫のお知らせ』は、「二十四節気　虫のお話（全3巻）」シリーズの2巻である。芒種から白露までを描いているこの巻は元気に溢れている。都会から九州とおぼしき自然豊かな地に越してきた6人家族の物語。子どもは、ひなた（小3）、あさひ（小1）、こだち（年中）、みなも（年少）の4兄弟。各章が一つの話にまとまっていて、主人公も替わるけれど、メインは母親のよりさん。

彼女は好奇心旺盛でマイペース、「筋が同じ」気の合う友人もでき、虫と人と自然に揉まれつつの暮し。よりさんは詩人の祖父に似た風雅人で、他の大人に見えないものと触れ合うことができる。彼女の赤く染めた髪の頭の中にはミンチン先生、スナフキン、山の上の火、金色夜叉、赤毛のアン、メアリー・ポピンズなどが詰まっていて、なかなかの教養人であるらしい。本文中でこれらのキーワードを見つけて嬉しくなる人は、きっとよりさんと「筋が同じ」だ。周囲の大人も、一見厳しく見えても実は優しい。登場人物と同じ小学3年生が自力で読むには難しいかもしれないけれど、クマのプーさんシリーズのように寝る前に読んでもらったら楽しめるはず。秋山あゆ子の独創的で美しい挿絵も魅力的である。読んだ読者は虫好きになれるはずと期待して選んだ。今回再読し多くの美しい言葉や表現、文章と出会うことができた。

〈その他のおすすめ本〉

・『おなかのすいた　ばったのトト』（得田之久さく、福音館書店）

・『くものすおやぶん　ほとけのさばき』（秋山あゆ子さく、福音館書店）

・『くものすおやぶん　とりものちょう』（同）

・『いもむしけむし』（澤口たまみ　ぶん／藤枝つうえ（福音館書店）

・『かみきりむし』（いまもりみつひこ文・写真、福音館書店）

・『がろあむし』（舘野鴻　作・絵、偕成社）

（報告　安田晶子）

【参加者の感想】読んでみたいと思った▼対象年齢は中学生以上だと思うが、大人が子ども時代を思い出す内容でもある▼虫の変態が子ども達の成長と家族が土地に馴染んでいくさまに重なる▼柳行李と樟脳は空間の変化を表す▼名前のデネ・ダコタは宮沢賢治的▼挿絵が素晴らしい▼よりさんと子ども達の距離感が良い▼「急がないのは才能」の言葉に共感▼虫を見る目が変わった▼読み聞かせに関する着想を学んだ▼多彩な比喩表現。絵文字のようなアルファベットと数字、身近な品を用い読者の視覚に訴える。有名作品の主人公を用い、言葉に奥行きを持たせる▼『堤中納言物語』の「虫愛づる姫君」の現代版。

（報告　堀畑真紀子）

講座報告

『初茜』に学ぶ①
4号「私の絵本づくり　赤羽末吉」

～機関誌『初茜』の講演録等を読み返し学ぶ企画～

日　時　12月18日（水）10時～12時
会　場　熊本市立図書館集会室
参加者　10人
担　当　木村一惠

◇読み聞かせ『つるにょうぼう』
（矢川澄子再話、福音館書店）…西坂治美

◇絵本画家・赤羽末吉講演「私の絵本づくり」（1986年5月開催）より

○『かさじぞう』
茂田井武・絵の『セロひきのゴーシュ』（福音館書店「こどものとも」）を見て感動。当時の編集長松居直氏に「雪国が描きたい」と言い、1961年『かさじぞう』でデビュー。

○『スーホの白い馬』
1961年に「こどものとも」で出したが、短期間での仕上がりに不満足だった。その後、再版希望が寄せられた際に、蒙古の赤を追加した五色刷りにし、横長の大型絵本で出した。

○絵本画家とは
お話を生かし、全力で読者に伝える。相手の中に入っていって楽しませる。子どもの感受性を育て、成長に何らかの形で役立つことが一つの理想。

○『つるにょうぼう』
・子どもに機（はた）を織るという概念を見せたいが、機織りの場面は見てはならず、本文に描けない。そこで表紙に描いた。

・最初の場面は、畑に鶴が舞い降りてくる話と、雪の中で矢を受けて身もだえしている話がある。作家は前者で書いてきたが、私は後者にした。この方が雪国の話らしくドラマチック。絵本は作家と画家と編集者が協議しながら作る。
・作品を生かす紙や筆を考える。奉書紙は墨の滲みに適さないと思っていたが、雪国の空気の厚みの感じが出る。屋内の貧しくて暗い雰囲気を出すのにくすんだ紙を使った。麻紙は薄汚れた感じで貧しさを出すのに一役買う。中世の風俗では着物は麻。粗い感じを出すために目の粗い線にしている。
・前の場面に鶴が飛んでいったという文があるものの鶴がいないと思ってめくると、ラストシーンで鶴が遠くを飛んでいっている。これが絵本のドラマ。余韻。

○制作について
下画きに1カ月位、ダミーも1カ月も2カ月もかかる。奉書紙に描くときは緊張する。水墨は筆を降ろしたらパパッと描かないといけないから、こわくて筆が降ろせない。1回1回が勝負。

○子どもの感性
子どもは、その絵が自分にとって面白いか面

白くないかで判断する。大人は既成の概念で枠を決めてかかるところがある。

◇他の講演などから補足

２０１２年５月13日 本会主催講座「昔話と昔話絵本の世界」講師：藤本朝巳氏（フェリス女学院大学教授・当時）／『絵本ＢＯＯＫ ＥＮＤ』２０１０（絵本学会発行、朔北社）より

・赤羽末吉最後の作品は『日本の昔話』全5巻（１９９５年初版、福音館書店）。２００枚ほどの挿し絵を描いた。

・原点は「樹下美人図」で正倉院蔵「鳥毛立女屏風」。赤羽が描きたい「深さと格調の高さと強さと人間的なやさしさ」があると言う。

・最後は宮沢賢治の作品に挑んでいた。

（報告 木村一惠）

〈参加者の感想〉 講演をじかに聞きたかった▼制作過程が分かり興味が増した▼読み聞かせで儚く悲しく美しい世界が現れたようだった▼赤羽作品は読むより絵を見る。絵と文は五分五分と言うが赤羽絵本は七三だと思う▼『スーホの…』の舞台はモンゴルだが実際は中国内蒙古の再話と知った▼『つるにょうぼう』は大人向けのドラマだと思った▼赤羽さんは相手が子どもでも媚びたり妥協したりしない▼松居直氏の講演で『かさじぞう』では扇面の広がりに近景と遠景を描いて遠近感を出し、背景は対照的に、室内は明るく外は暗い紺系を使っていると聞いた▼『つるにょうぼう』のラストシーンに込めた赤羽さんの思いが子どもたちに伝わると嬉しい▼『ねずみのすもう』も『つるにょうぼう』も中世の風俗ということが分かった▼中世は散村で、極貧の爺婆・男はサトヤマの際あたりで暮らす。新潟の昔話から着想を得ていると思う▼木下順二と交流があったこと、ドラマ性があることから、絵本における「夕鶴」だと思った。最後の場面は「おつう」がよたよたと飛んで行く「夕鶴」と重なる▼小さい頃読んだ「鶴の恩返し」と『つるにょうぼう』の印象が違った。『つるにょうぼう』というタイトルにした意味が分かった▼徳を積む、孝行、恩返しというと従来の道徳感がのぞく▼雪国を描くため何度も通った体験により雪質、重たさ静かさが伝わる。宮沢賢治『ひかりの素足』『水仙月の四日』に重なる。

赤羽氏の講演は１９８６年で、今回の講座出席者は誰も聞いていないが、『初茜』で学ぶことができ、感謝の気持ちでいっぱいである。

（報告 有久賢治）

報告 第9回「子どもと大人の読書会」

日 時 1月5日午前10時～11時
場 所 オンライン会合（Ｚ００Ｍ）
参加者 7名（小学5年生3名、大人4名）
司 会 興津 暁子

今回の課題図書は**『ひかる！①本気〈マジ〉負けない！』**（後藤竜二著、そうえん社）。負けず嫌いの小学4年生ひかるが担任の海堂先生やクラスメートと協力して全校ドッジボール大会で準優勝するまでの物語。小学生からは▼好きなシーンは、海堂先生が校門まで走ってひかると競争するところ。子どもと競う海堂先生も面白いし、知らない大人と競うひかるも先生に劣らず負けず嫌い。海堂先生は「暴力はダメ」と話すなど筋が通っていて好き。こういう先生が担任だったらいいのに▼私も好きな箇所は、道で抜かされただけで2人がいきなり競争を始めるところ。大人と子どもが本気で競うところを見たことがない。海堂先生がジャージに着替えてドッジボールをするシーンも驚いた。うちの学校では先生がジャージを着ることはない。不思議なのは先生もひかるもかけ声が「前進あるのみ。ＧＯ！ＧＯ！」と同じこと▼ドッジボール

大会の練習に最初は3人しか集まらなかったのに、「朝の会」で1回話し合っただけで、みんなで練習をするようになり決勝戦まで行く。みんなの頑張りが見えるところがいい。ひかるの掛け声を先生が知っているところは私も不思議▼掛け声の謎は3巻全部読んだが分からない――などの感想が出た。

大人からも▼みんなが話し合いをして一致団結する過程がいい。ひかるがみんなに責められたとき、以前一人だけ悪者にされそうになった子をひかるが体を張ってかばったと風間君が過去の話を持ち出してひかるにエールを送る。この子たちはいい学校生活を送っている▼血気盛んなひかるが、海堂先生や友だちに恵まれ、人間として本当の強さを身につけていくという期待が持てる。ところが２００８年から09年にかけて全3巻を出版した直後の10年に著者は亡くなっている。生きていればシリーズは続き、ひかるの成長ぶりを楽しめたのに残念。海堂先生の「いいたいことは、ことばでいおう！わたしは、どんな小さな暴力も、ゆるしません」という言葉も心に響いた。生徒への教えが、戦争や暴力が絶えない現代への普遍的なメッセージになっている▼たまたま著者の『風景』（岩崎書店）という本を手に取り読んだ。自身の小学校時代を描いた自伝的作品で、大さわぎ学級であることは『ひかる！』と同じ。途中で担任の先生がやめてしまい、新しい先生が来るが、当たり障りのないことばかり言う。そんな「桐組」をまとめようと奮闘する「ぼく」の姿がひかるとだぶる。『風景』を読んで『ひかる！』を読むと、こうあってほしいと思う理想の教師像を海堂先生に託したように思える。ひかるは朝の会で糾弾されても泣かずに我慢する。それを海堂先生は見ていて、温かい手のひらでそっとひかるの背中をおす。こういう先生なら大さわぎ学級の生徒もついていく▼ひかるが学校好きなのには驚いた。とんがり方もすごい。朝の会で悪いところを指摘されたのは、ひかるにとってよかったかもしれない▼みんなの話を聞くうちに、先生たちこそこの本を読み、子どもが先生に望むことを学んでほしいと思った――などの感想が出た。

今回は、小学生3人が自身のクラスの現状や教師に望むことも話してくれた。それぞれの悩みを共有したこの読書会が、子どもたちにとってよいひとときであったことを心から願う。

（報告　横田恵美）

参加者募集

オンライン講座 第5回「グリム童話の魅力」

日時　2月23日（日）10時～12時

講師　竹内識晃（東京家政学院大学非常勤講師・熊本子どもの本の研究会会員）

『子どもと家庭のメルヒェン集』（通称「グリム童話集」）を比較民話学で読み解く講座です。「グリム童話集」を丁寧に読み、その魅力をお話しします。今回は、「ブレーメンの町の音楽隊」（ＫＨＭ27）を取り上げ、その類話とともに読み解きます。昔話は類話が多いのが特色の一つです。類話と比較することで、「グリム童話集」への理解を深めていきます。講座では、昔話の用語も解説しながら、進めてまいります。なお、グリム童話のテキストは、お手持ちの翻訳で結構ですので事前にお読みください。類話などの参考資料は事前に配付します。この講座は、毎回、取り上げる話が異なりますので、新たに受講される方も歓迎します。グリム童話を読む楽しさを、ぜひ一緒に味わいましょう。

参加希望の方は、左記アドレスに「グリム童話の魅力・参加希望」と明記し、2月20日までに申し込みください。

※申し込みアドレス　zoom@kodomonohon.org

2月、3月の活動の案内

○講座　わらべうたであそぼう！
日時　2月19日（水）10時～12時
場所　熊本市立図書館集会室

○講座　閉講講座　今年度を振り返って
日時　3月12日（水）10時～12時
場所　青年会館第一会議室
＊講座申込アドレス kouza@kodomonohon.org

○研究会活動検討会（オンライン）
日時　2月9日（日）10時～12時

○グリム童話の魅力（オンライン）
日時　2月23日（日）10時～12時
＊申込アドレス　zoom@kodomonohon.org

○おはなしボランティア「びわの木」
・1月25日（土）14時～14時半
熊本県立図書館（幼児・小学生）
・2月6日（木）11時～11時半
熊本県立図書館（0歳児）

○「びわの木文庫」貸し出し予定日
1月25日(土)、26日(日)、
2月9日(日)、15日(土)、16日(日)、
3月8日(土)、9日(日)、22日(土)、23日(日)
お越しになるときは事前にご連絡願います。

本はともだち！

最近、旅行先で図書館を訪問して楽しんでいます。昨年9月に訪問したブダペストのメトロポリタンエルヴィンサボ図書館は、一般市民が普通に使う図書館なのですが、19世紀の宮殿建築の中にあります。4階部分は宮殿形式の内装がそのまま残されており、螺旋階段が四面に本棚が配された中二階の周り廊下に繋がっている部屋は、「マイ・フェア・レディ」のヒギンズ教授の図書室を思い起こさせるものでした。その部屋の中で、市民の方々が読書したり、パソコン打っていたりする姿は印象的でした。日本も歴史的建造物をもっと公共の場として活用したら良いのではと思いました。

圧巻だったのは、ウィーンの国立図書館プルンクザールです。18世紀前半のバロック建築の元王宮図書館で、高い屋根の大ホールが連なる部屋の壁の1階及び周り廊下の中2階にそれぞれ12段ほどの本棚が設置され、16世紀から19世紀半ばにかけての書籍20万冊が所蔵されています。本棚以外の壁は緻密な装飾が施されていて、世界一美しい美術館と称されることに頷かせられます。同時に、この図書館を作り、運営してきた方々の、本に対する強い想いも感じさせられました。

11月初めに軽井沢に旅行に行った際には、町立中軽井沢図書館を訪問しました。軽井沢駅からしなの鉄道で4分の中軽井沢駅の改札を出たら、図書館の2階にそのまま入れます。そのアクセスの良さにまず驚きました。外が見渡せる明るい窓際に設置されたテーブルでは、アウトレットの喧騒から離れ、ゆっくり本を読むことができそうです。ちなみに、軽井沢の住人でなくとも、登録すれば本は借りることができるとの事。ふと『神話的時間』があるかなと思って検索したところヒットしたので、検索結果を印刷して探してみました。閉架書庫ではなく、本棚にしっかり並んでいるのを見つけることができた時には、心が暖かくなりました。国内の様々な図書館を訪問する際の楽しみが一つ増えました。

（横田　真）

■編集＝金子・上林・横田　《イラスト》安田

特定非営利活動法人
熊本子どもの本の研究会　発行
〒861－8029
熊本市東区西原1丁目15の24
電話　096（382）5090